

オデッサからヤッフォへ —19世紀ロシアにおけるヘブライ文学の発展

高尾 千津子

1. はじめに

18世紀末のプロイセンで始まったユダヤ人啓蒙運動（ハスカラー）は19世紀なかばになると東欧、ロシアへとその中心が移動した。ユダヤ人社会の内部変革を希求したハスカラー運動がロシアで広まっていく背景には、19世紀初頭以来のロシア帝国政府によるユダヤ人改革の試み¹⁾に加え、ユダヤ社会内部における伝統的権威の揺らぎがあった。マスキリーム（ハスカラーの担い手たち）はユダヤ人社会の近代化、宗教の改革、世俗教育の推進により、ユダヤ人とキリスト教社会との垣根を取り払い、キリスト教社会におけるユダヤ人の地位向上を目指した。

ロシアにおけるハスカラー運動の特徴とは、第一に農業や肉体労働を通じたユダヤ人の生産者化を重視したことであろう。それは商業や金貸しなどに偏った伝統的なユダヤ人の経済的役割を改め、農業や手工業などのより「有益な」職業構成をもつユダヤ人社会を作り出すことであった。さらにハスカラー運動を通して、ヘブライ語による世俗文学がロシアで大きな発展をすることになった。こういったハスカラーの特徴は、19世紀末の同運動の衰退後も、ロシア・シオニズムに受け継がれ、ロシアからの移民を通して20世紀パレスチナに移植された。20世紀におけるヘブライ語の「復活」には、19世紀ロシアにおけるハスカラー文学とヘブライ語による世俗文学（新ヘブライ語文学）が重要な役割を果たしたのである。

周知のようにヘブライ語はユダヤ人にとって「聖なる言語」であったが、決して死語ではなく、宗教的な著述やラビの回答書（レスポンス）などに使われていた。ユダヤ教初等教育の基幹となっていたのは、ユダヤ人男性に求められる基本的なヘブライ語の読解力（「読み書き」ではなく）の習得、すなわち日々の祈りや聖書を繰り返し唱えることで自然に覚える読解力の養成であった。だが、ユダヤ教の基礎的書物以外の、複雑な文章の読解や、ヘブライ語で書く能力を持つ者は、近代以前の東欧では少数の知的エリート層に限られていた²⁾。ちなみにハスカラー運動が、ユダヤ人の日常語であったイディッシュ語ではなく、聖書の言葉であるヘブライ語を用いたのも、エリートに属したマスキリームがイディッシュ語を、高邁な文学や詩の創作には相応しくない、「崩れたドイツ語」とみなしていたからにほかならない。

2. 『ハ・メリツ』——ヘブライ語定期刊行物の役割

近代におけるヘブライ語の定期刊行物の誕生はヘブライ語の復活に重要な役割を果たした。1783年に最初のヘブライ語紙『ハ・メアセフ (המאסף)』がベルリンで出版され、長く凍結されていた言語に新たな息吹が吹き込まれた。ロシアにおけるヘブライ文学の発展に重要な役割を果たしたのも、19世紀半ばから刊行され始めたヘブライ語の定期刊行物であった。なかでもロシア最初のヘブライ語紙（当初は週刊）『ハ・メリツ (המליץ)』(1860-1904) はとくに重要である。同紙は黒海沿岸の都市オデッサで産声を上げた。1871年に首都ペテルブルグに移動し、1886年以降は日刊紙（週6回発行）となった。紙名の由来と意味については様々な解釈があるが、発行された当初、巻頭ページには「ユダヤの民 (עם ישראל) と政府の、信仰と啓蒙との間の仲介者 (המליץ)」という誌名の由来がかかれていることから（図1を参照）、「仲介者」を意味すると考えられている³⁾。これは同紙がハスカラー思想を代弁するだけではなく、ロシアユダヤ人全体とロシア政府との橋渡しであるという自負を感じさせる紙名である。創刊者はアレクサンドル・ツェデルバウム (1816~1893) であるが、1880年には詩人イェフダ・レイプ・ゴルドン (1830~1892) も編集陣に加わり、当時の重要なヘブライ作家のほとんどが同紙に寄稿するなど、ヘブライ文学の拠点となった。1885年の予約購読者数は2500に達していた。当時10ルーブリという高額な購読料を払えた者はわずかであったことから、ある研究は（一部15人程度の読者がいたとみなし）6万人程度の読者が存在したと見積っている⁴⁾。



図1：『ハ・メリツ』1860年第3号のタイトルページ。発行初年度はこのようにヘブライ語とユダヤドイツ語（ヘブライ文字で書かれたドイツ語）の二言語が併用された。

ヘブライ作家のルーベン・ブライニン (1862~1939) によれば、『ハ・メリツ』は1880年代末までロシアで唯一の「ホヴェヴェイ・ツイオン」機関紙として、ヘブライ語

復活の最前線に立っていた。また、ペレツ・スモレンスキに始まり、アハド・ハアム、ビアリク、レヴィンスキー、ベルディチェフスキーらほとんどすべてのヘブライ作家の最初の作品が同紙に掲載された、とブライニン⁵⁾は述べている。ベルリンに移り住んだブライニンもまた『ハ・メリツ』にしばしば寄稿していたが、彼がアブラハム・マプー⁶⁾執筆に際して、資料収集への支援を広く読者に訴えたのも『ハ・メリツ』紙上においてであった。(図2参照)

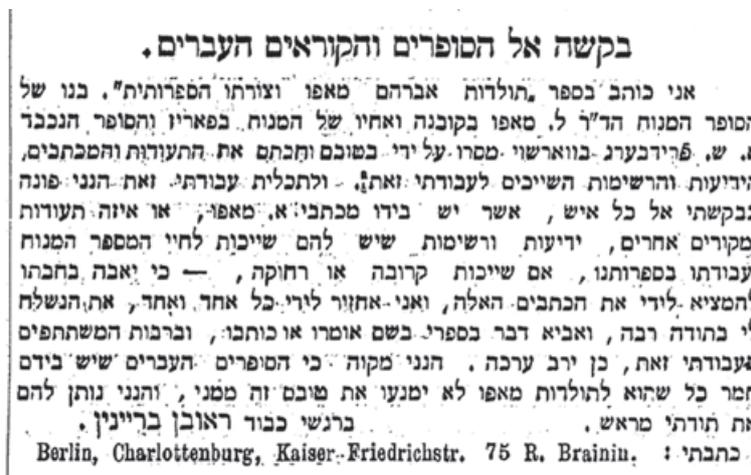


図2：『ハ・メリツ』1897年3月30日号 ブライニンによる「ヘブライ語読者と作家への要望」

『ハ・メリツ』はヘブライ作家の登竜門であっただけではない。このヘブライ語紙には日常の事件やロシア国内の様々な都市やユダヤ人入植地の情報、シュテットルの事件——例えば1881年ポグロム情報なども掲載された。またロシアばかりでなく、パレスチナや欧米などの海外事情や、国外で発生した「血の中傷」などの反ユダヤ主義事件にかんする記事も掲載し、このため当局から数ヶ月の発禁処分を受けたこともあった⁷⁾。ロシアでヘブライ語新聞が世俗の諸問題を扱うようになるにつれて、大衆読者のヘブライ語知識を引き上げ、19世紀末にはヘブライ語は「エリートの言語」を脱却し、その読者層にも広がりが見られるようになったものと思われる⁸⁾。

3. 古い世代と新しい世代

3-1. アブラハム・マプー

19世紀中葉のハスカラー文学の著述家から、本稿ではアブラハム・マプーとモシェ・リリエンブルムの二人に焦点を当ててみたい。この二人は19世紀後半ロシアのユダヤ人

青年層、特に伝統教育を受けた青年たちの中で最も広く読まれ、影響を与えたと思われるヘブライ語作家だからである。マプー伝を書いたブライニンもまた、影響を受けた一人であった。彼はハスカラーのサークルで初めてマプーの『偽善者 (עֵיט צְבוּעַ)』(ヴィリニウス、1857年)を読み、主人公で農学者のネエマンが彼の青年時代の理想となったと晩年の自伝で記している。ブライニンによれば、彼がヘブライ語作家になろうと決心した頃(すなわち1870年代)のハスカラー文学は「無味乾燥で、ユダヤ人の現実生活から全くかけ離れた」ものであった。ヘブライ作家たちの多くが(ブライニンいわくメンデレスら当初は例外ではなかった)古くさい表現ばかりを用い、自らの内面から沸き起こる自由な表現をしないと酷評したブライニンは、数少ない例外としてアブラハム・マプーとイツハク・エルテルの二人をあげている⁹⁾。

ロバート・アルターはハスカラー時代のヘブライ文学を「聖書の源泉から編まれたごわごわした織物」と形容している。アルターによれば、ヘブライ作家たちがしばしばこうした純粋主義に陥ったのは、多言語環境のなかで作家たちがヘブライ語の純粋性を守り、ヨーロッパ文学と同等の高尚なヘブライ文学を創造しようとしたためであり、また語彙がより豊かでシンタックスも柔軟なラビ・ヘブライ語を避け、聖書ヘブライ語のみに拘泥した結果であるとする¹⁰⁾。このようななかでアブラハム・マプーは大衆の心に深く訴えることができた最初のヘブライ語作家であり、その影響力は世代を超える力があつた。

アブラハム・マプー(1808年カウナス生～1867年ケーニヒスベルグ没)の最初の著作『シオンの愛 (אהבת ציון)』¹¹⁾は第一神殿時代のパレスチナを舞台とする歴史ロマンスである。この著作が発表された1853年は、近代ヘブライ文学ばかりでなく、ヘブライ語の復活にとっても記念すべき年となった。マプーを通して、ユーージェーヌ・シュエヤデマといったフランス文学、なかでも犯罪や冒険、ラブロマンスなどそれまでの東欧ユダヤ人の生活には無縁の主題が移植された。

世俗文学の世界に彼[マプー]が出会ったのは偶然であつた。ラテン語版聖書を偶然手にしたマプーは、そこからこの古典語を勉強し、マスターしたのち、文学を勉強しはじめ、そして彼の前には新しい世界が開けた。……ロシア語、ドイツ語、フランス語の文学の泉、……柔軟で、奥ゆかしく、夢見がちな彼は、なかでもユーージェーヌ・シュエの幻想小説の影響を受けずにはいられなかった。……ロシアの小さな町、タルムード学校といった退屈な現実よりも、彼がロマンチックな遠い過去へ引きつけられて創作した理由は容易に理解できよう¹²⁾。

一方、「ユダヤの新エロイーズ」とこの小説を評したナフム・スローシによれば、この小説は単なる「歴史ロマン」ではなく、ロシアの重苦しい現実から、時代的にも地理

的にも遠く離れた古代を舞台に、ハスカラーの思想や倫理観、自然への回帰を教えるものであった。ルーベン・プラインニンによれば、マプーに『シオンの愛』執筆の構想が浮かんだのは彼が22才、1830年の時であった¹³⁾。すなわち構想から出版までに20年を要したことになる。この作品は1853年に発表されるやいなや、ユダヤ人社会に熱狂的に受け入れられた。ヘブライ語によるラブロマンスの試みは、伝統社会からは「聖なる言語」に対する冒瀆と見なされた一方で、イエシヴァやシナゴグの中にまで入り込んで、多感な青年たちを虜にした。

青年たちはこの本の詩的高揚とセンチメンタリズムに驚愕し、そして陶醉した。人々はまるで千年の眠りから覚め、再び生を受けたようだった。古き時代の崇高さに引き比べた現実の惨めさが、人々の心にくっきりと刻まれたのであった¹⁴⁾。

当時の青年による次の回想は示唆的である。

単調で、欲得尽くの毎日、抑圧された日常から、突然われわれは魔法の力ですばらしい土地へと連れて行かれた。文化と詩が花咲く黄金時代のパレスチナへと。我々の目の前に魅惑的な光景が現れる。一面に広がる麦畑と葡萄畑、エルサレム・・・王の宮殿と神殿の丘、シオンの要塞の高い城壁と塔・・・

このすばらしい光景・・・生を愛する人々のこの力強い肉体と魂はどこからやってくるのか・・・これはけっして幻想ではないし、妄想でもない。これはすべて聖書を完璧に写し取った、見覚えのある風景であり、親しい人々の現実的な表象なのだ。彼らこそ本物のユダヤ人だ。だが、もし彼らがユダヤ人なら、われわれはいったい誰なのだろう？¹⁵⁾

マプーの小説に現れた古代イスラエルの躍動する生の魅力は、パレスチナでのユダヤ民族の再生というイメージーションを刺激し、後のシオニズムへの土壌を用意したと思われる。

3-2. モシエ・リリエンブルム

19世紀中葉のヘブライ文学はロシア文学の影響も強く受けることになった。1860年代から70年代にかけてのロシア・リアリズムやニヒリズムの作家や批評家、トゥルゲーネフ、チェルヌイシェフスキー、なかでも既成の権威や道徳を否定したドミトリー・ピーサレフは、ロシアの知識人層に衝撃を与えたが、ユダヤ系知識人も例外ではなかった。

モシエ・リリエンブルム（1843年ケイダン生～1910年オデッサ没）はマプーの次の世代に属するヘブライ作家であり、ヒバット・ツイオン運動のリーダーとしてシオニズム史では重要な位置を占める。ヴィリニウスに近い、リトアニアの小都市ケイダンに生まれ、伝統教育を受けたリリエンブルムは、当時の伝統的ユダヤ人の例に漏れず幼くし

て結婚し、23才でヴィリニウスにイエシヴァを経営し始める。この若きユダヤ教教師に大きな影響を与えたのがアブラハム・マプーの著作であった。リリエンブルムは1868年に『ハ・メリツ』紙上でタルムードを批判し、ユダヤ教改革を訴えた。だがこのために故郷で迫害され、リリエンブルムはゴルドンの助けで26才のときにオデッサへ逃亡する。ところがオデッサで窮乏、飢餓と孤立に苦しんだリリエンブルムは、一世代前のマプーの小説が主張するようなハスカラーの未来像、教育によるユダヤ人改革の可能性に疑問を抱くようになる¹⁶⁾。

敬虔なユダヤ教徒であったリリエンブルムが、ニヒリスト、ピーサレフの影響のもとに青年時代に芽生えた神の存在に対する疑いとタルムード批判、ラビから受けた迫害を、記憶だけでなく、日記や手紙などの資料に基づいて赤裸々に綴った『青春時代の罪(חטאת נעורים)』(1876年)は、ユダヤ教の権威からは禁書とされながらも、青年たちの間で広く読まれたヘブライ文学であった¹⁷⁾。

(1861年の)新年祭に私は宗教的な恍惚に満たされていた。・・・4日目に突然恐ろしい考えが意識に浮かび上がった。「神の存在を誰が証明できるのか?」・・・もしこれが合理的な疑問であれば、合理的な回答を見つけて私は疑いを心から消し去っていただろう。だが、この疑問はわたしが神に没頭しているさなかに生じてきた。・・・私は宗教書を読んでこの恐ろしい考えを鎮めようとしたが、無駄であった¹⁸⁾。

リリエンブルムよりさらに一つ後の世代、すなわち19世紀後半のロシアで青春時代を過ごしたユダヤ人の回想には、しばしばこの著作の破壊的な影響力が描かれている。ヘブライ文学者でシオニストのミハ-ヨシフ・ベルディチェフスキー(1865~1921)によれば、『青春時代の罪』は新しい世代が古い世代に突きつけた「離縁状」であった¹⁹⁾。その影響はマスキールやシオニストに留まらない。ヴィテプスクに生まれ、後にイディッシュ作家となったセミヨン・アキモヴィチ・アン=スキー(1863~1920)もまたリリエンブルムの影響を受けた一人であった。17歳のときにリトアニアの小さな町で教師の職を得たアン=スキーは生徒にこっそりとリリエンブルムの『青春時代の罪』を読ませたことが親たちに知られ、どうにか破門は免れたものの、ラビの命令で町から追放される²⁰⁾。セミヨーン・ドゥブノフ(1860~1941)にとって古い世界の「狂信者」と戦ったリリエンブルム、理想主義的なハスカラーを脱却してロシアの実践的教育への道を説いたリリエンブルムは、彼の人生の「英雄」であり道標であった。そのドゥブノフも17才の時にウィーンで出版された直後の『青春時代の罪』を読んで衝撃を受ける。

ハスカラーと我々若者のすべての夢と意欲に死刑を宣告したこのハスカラーの英雄の〈告白〉を、私はぞっとしながら読んだ。要するに、新旧の世界の間にいる我々は皆、冷徹なりアリストとポジティビストの新しい世代が生まれてくるまでの橋渡しとなる移行期世代に属している、ということだ。当時は自分自身が新しい陣営にまもなく移動することになるとは想像もできなかった²¹⁾。

リリエンブルムの人生は自由主義的なアレクサンドル二世時代（1855年～1881年）と1881年の皇帝暗殺、ポグロム、反動という帝政末期の激動によって大きな振幅をみせる。1881年春にエリサベトグラード、キエフ、オデッサなどウクライナのユダヤ人を襲ったポグロムは、近代ユダヤ史における画期をなす事件であった。近代ヘブライ文学に関する研究もまた、ハスカラー文学との分岐を1881年ポグロムとしている²²⁾。すなわちポグロムを契機としてハスカラーが従来描いていたユダヤ人の「明るい未来」像が暗転し、ハスカラー思想は破棄される一方でヒバット・ツィオン運動などのシオニズムの先駆けが生まれた。

1881年5月、オデッサでポグロムに遭遇したリリエンブルムも、その衝撃によって再び大きな内面的変化を経験した。5月7日のリリエンブルムの日記には、「暴徒が家の近くまでやってきた。女たちは悲鳴をあげ、子供を胸に抱き、右往左往している。男たちは茫然と立ちすくんでいた。だれもが最悪の事態を想像していた」、となすすべもなくポグロムにさらされるユダヤ人の恐怖が記されている。幸いなことに、ポグロムには軍が介入し、暴徒達を追い払ったためにリリエンブルムは無傷ですんだ。だが、彼の精神にはこのポグロムを境にして大きな変化が起きた。彼がポグロムから感じ取ったのは恐怖だけではなかったのである。日記は次のように記している。

わたしはこの苦しみを感謝している。祖先が毎日感じていたこの感情を、生涯はじめて味わえたことを。・・・私は彼らの息子であり、彼らの苦しみは私にとって大切なものだ。私は彼らの栄光によって高められる²³⁾。

リリエンブルムにポグロムが及ぼした劇的な変化はよく知られており、彼はこの後、ユダヤ人のパレスチナでの民族的再生こそが唯一の解決策であると説くのである²⁴⁾。

ポグロムはなるほど近代ユダヤ史における重大な分水嶺であった。だが、すでに1870年代半ばには、ロシアの社会主義、ナロードニキ思想やナショナリズムの影響を受け、ユダヤ人の間でもインテリ、特に若い世代の間で「上からの解放」と同化を説くハスカラーの求心力は急激に弱まっていた。なかでもペレツ・スモレンスキ、エリエゼル・ベン=イエフダらによるハスカラー攻撃がウィーン拠点の雑誌『ハ・シャハル』²⁵⁾で始まっていた。ユダヤ人はハスカラーの先駆メンデルスゾーンが言うような宗教セクトで

はなく民族であるとする言説（スモレンスキ）やパレスチナでのヘブライ語復活の主張（ベン・イエフダ）はすでにポグロム以前に現れていたのである。20世紀初頭、ユダヤ文学史研究者のセルゲイ・ツインベルク（イスロエル・ツインベルグ1873～1939）は次のように指摘している。

1870年代にはロシアのラジカリズムの影響を受けた詩が現れ、・・・またユダヤ人の民族思想がペレツ・スモレンスキによって主張された。スモレンスキはユダヤ人が宗教セクトではなく、「政府や国はないが、一つのまとまった民族」であり、他と異なるのはユダヤ人が「精神的民族」（духовная нация）であることである、と述べた。特に1879年から80年にかけて『ハ・シャハル』にはエリエゼル・ベン・イエフダの主張が掲載され、ユダヤ民族の維持と再生は祖先の土地と聖書の言葉の復興によってのみ可能であり、自分の歴史的領土でのみユダヤ人はその精神的な発展が可能であると述べた。ベン・イエフダの見解は80年代以降、ポグロムと反動が強まり、ハスカラー思想が瓦解するとインテリゲンツィヤのあいだで支配的な考えとなった²⁶⁾。

キリスト教社会におけるユダヤ人の地位向上に向けたハスカラーの失敗はあきらかであったが、伝統的なユダヤ社会に対する啓蒙運動や世俗的教育の影響はもはや後戻り不可能なほどに進んでいた²⁷⁾。

4. オデッサからヤッフォへ——ロシアにおけるヘブライ文学の終焉

ロシアにおけるヘブライ文学の発展について語る上で、オデッサという都市は重要な位置を占めている。18世紀末ロシアが黒海沿岸一帯をトルコから併合した後、辺境の前哨として建設された港がオデッサである。同時に「ヨーロッパへの南の窓」としてオデッサは19世紀半ばに自由港となり、ウクライナ南部の穀倉地帯拡大を背景に急速な発展を遂げた。周知のように帝政ロシアではユダヤ人に対する居住制限があり、ユダヤ人の圧倒的多数は旧ポーランド領を中心とする「ユダヤ人定住地域」に居住を限定されていた。オデッサを含む黒海北岸一帯はユダヤ人定住地域15県のなかに含まれた。ユダヤ人人口が稠密な北西部（リトアニア、ベラルーシ）からオデッサへと多くのユダヤ人が様々な機会を求めて引き寄せられた²⁸⁾。

19世紀末のオデッサには14万のユダヤ人（市人口の35%）²⁹⁾が住み、定住地域最大のユダヤ人中心地となっていた。本論で言及したヘブライ作家たち——マプー、リリエンブルム、ブライニン、メンデレ、ベルディチェフスキー、ゴルドンらは定住地域北西部（多くはリトアニア）に生まれ、（最初の世代のマプーを除いて）全員がオデッサに（一時的にせよ）足を踏み入れた。ほかにも多くの作家たち、アハド・ハアム（1856～

1927)、チェルニホフスキ (1875～1943)、ピアリク (1873～1934)、ヘブライ文学者のヨセフ・クロズナー (1874～1958) らが住んだ。オデッサはヘブライ文学の拠点というだけでなかった。ユダヤ系ロシア語作家イツハク・バベル、ジャボティンスキーらの故郷であり、ヘブライ語作家から大衆のジャルゴン (=イディッシュ語) に転じたショーレム・アレイヘムも、そしてドゥブノフもオデッサに住んだ。

商業都市オデッサはまさしく多民族、多宗教、多言語の都市であった。「オデッサの劇場では5つの言語で公演が行われ、町なかではロシア語、イタリア語、ドイツ語、タタール語、ポーランド語、ギリシャ語、トルコ語、アルメニア語、モルダヴィア語、ブルガリア語、ハンガリー語、ダルマチア語、フランス語、スウェーデン語が旅人ばかりか、住民によっても話される」と1830年代のオデッサを訪れたドイツ人旅行作家のヨハン・G. コール (1808～1878) は、「バベル的言語混乱の極み」と驚嘆しつつ記している³⁰⁾。「バベル的な」状態は19世紀末になってもかわらなかった。オデッサで生まれ少年時代をこの町で過ごしたウラジミール・ジャボティンスキーは、オデッサでは1ダースもの言語が話されていたと述べている³¹⁾。

帝政ロシアのユダヤ人たちはイディッシュ語とヘブライ語というユダヤ人の言語だけでなく、ロシア語、ドイツ語、ウクライナ語などの多言語を同時に使い分けて生きていた。一人の人間が三、四言語を使い分けるのは珍しくなかった。作家もそうであった。メンデレ・モヘル・スフォルム (1835～1917) は1860年代からヘブライ語で執筆し、後にイディッシュ語に転向したが、オデッサに移住した1880年代に再びヘブライ語での執筆活動 (自作のヘブライ語訳) に戻った³²⁾。メンデレはイディッシュ語作品のヘブライ語訳を通して、それまでのヘブライ文学にはなかったユダヤ人の日常生活の描写やコミカルで生き生きとした表現のヘブライ語への導入を図ったのである。イディッシュ作家として名の知れたショーレム・アレイヘムやヘブライ語主義者のアハド・ハアムも家庭ではロシア語を話していた。革命後のソヴィエト体制の下で活躍したイディッシュ作家たち (ナフム・オイスレンデル、イエズケル・ドブローシュン、イツハク・ヌシノフ、ペレツ・マルキッシュ、レイブ・クヴィトコ、ドヴィッド・ホフシュテイン) にしても皆、革命前はロシア語、イディッシュ語、ヘブライ語の三言語、(時にはウクライナ語も含む四言語で) 執筆活動を行っていたのである。だが、社会、文化、芸術、教育など様々で場で繰り広げられたユダヤ人のこうした多言語性にもかかわらず、イディッシュ語とヘブライ語という二つの「民族語」の衝突は、20世紀初頭のブンドとシオニズムとの対立を背景に強まった。

ロシア革命後もロシアは、ヘブライ文学の重要な拠点であった。イエフダ・スルツキーによれば、1917年の革命後の3年間で188点にのぼるヘブライ語出版物がロシアで

刊行され、なかでもオデッサで出版されたものは119点（全体の63%）を占めた。内容は教育、児童書が85点と最多であり、文学、批評は29点、宗教関連の出版物は15点であった³³⁾。この時代のオデッサは革命、内戦、ボグロム、飢饉に相次いで見舞われていたが、困難な時期にもかかわらず、ロシアでヘブライ文学の新たな息吹が芽生えていたのである。

だが、ロシアにおける最大の試練は1917年の革命とその後の3年に及ぶ内戦を経て、共産党政権が勝利した後に始まった。20世紀初頭から始まっていたブンドを中心とするイディッシュ語主義とシオニストによるヘブライ語主義の衝突は、ロシア革命後激化し、「ユダヤ人大衆の言語」を自認するイディッシュ語主義が勝利すると同時に、「ブルジョワ・シオニズムの言語」という烙印を押されたヘブライ語に対する弾圧が始まった。ヘブライ語の弾圧はソヴィエト政府やロシア共産党ではなく、革命後にブンドから共産党へ転向したユダヤ人たち——「共産党ユダヤ部局（イエフセクツイヤ）」の手によって行われた。

1921年6月、ハイム・ナハマン・ピアリクをはじめとする12人のヘブライ作家の集団が家族とともにオデッサの港を出航した。そのなかにはベン・ツィオン・ディヌール（1884～1973）、アルテル・ドルヤノフ（1870～1938）、アヴィグドール・ハメイリ（1890～1970）、シャウル・チェルニホフスキー（1875～1943）らがいた。彼らはイエフセクツイヤの目を逃れ極秘に、ソヴィエト当局にパレスチナへの出国を申請し、妨害に遭いながらもマクシム・ゴーリキーの奔走により合法的な出国許可を得たのである³⁴⁾。こうしてロシアにおけるヘブライ文学は、作家たちの出国とともに終焉を迎えることになる。

注

- 1) 18世紀末のポーランド分割によって100万近いユダヤ人を抱えることになったロシアでは、分割直後からユダヤ人改革の試みが始まった。最初のものにはアレクサンドル1世時代の1804年法令による「有益化」政策——ユダヤ人の居酒屋経営を禁止し、農業入植と手工業を奨励した政策がある。
- 2) John Myhill ed., *Language in Jewish Society: Towards a New Understanding*, Clevedon, 2004, p.64. 聖書ヘブライ語から現代ヘブライ語にいたる歴史についてはアダ・タガー・コヘン「聖書ヘブライ語と現代ヘブライ語——アイデンティティーを求めて——」『基督教研究』第71号第1巻、同志社大学神学部基督教研究会、2009年、63-71頁を参照。
- 3) Menuhah Gilboa, *Leksikon ha-itonut ha-ivrit bemeot ha-shmoneh-esreh vecha-teshah-esreh*, Tel Aviv, 1992.
- 4) Shaul Stampfer, “What did ‘knowing Hebrew’ mean in Eastern Europe?” in Lewis Glinert ed.,

Hebrew in Ashkenaz: A language in Exile. New York/Oxford, 1993, p. 136. ベルリン・ハスカラーによって18世紀末に創刊されたヘブライ語誌『ハ・メアセフ』の有料購読者は、たった120人であった。(Robert Alter, *Hebrew and Modernity*, Indiana University Press, 1994, p. 49.) 一方、イディッシュ語日刊紙は20世紀初頭までロシア帝国で発刊を許されなかった。初めて許可が下りたイディッシュ語日刊紙 *Der Fraynd* は、1903年の創刊からほどなくして10万近い購読者を獲得した。(Stein, Sarah Abrevaya, *Making Jews Modern: The Yiddish and Ladino Press in the Russian and Ottoman Empires*, Indiana University Press, 2004, p. 33.) これは当時ロシア帝国で発行されていたヘブライ語新聞——『ハ・メリツ』の他に『ハ・ズマン』(1903~1915, 発行部数 8000) などが束になっても太刀打ちできない数字であった。

- 5) Reuben Brainin, *Fun mayn lebns-bukh*, New York, pp. 306-310. ブライニン(モギリョフ県リャーディ)に生まれたヘブライ語作家であり、スモレンスキンをはじめ多くの作家の伝記を書いた。ブライニンは幼少期に伝統的な教育を受け、青年時代にハスカラー思想に接した。1892年にウィーンへ移住し雑誌 *Mi mizrah u-mi maarav* を創刊、『ハ・シロアハ』(アハド・ハアム編集)をはじめ多くのヘブライ語誌に寄稿、1909年にニューヨークへ移住した。シオニストであるが、ソヴィエト政権による極東ユダヤ人国家建設計画(「ビロビジャン計画」)も支持した。興味深いことに(ここで引用した)晩年の自伝はイディッシュ語で書かれている。
- 6) Reuben Brainin, *Avraham Mapu: hayav usefarav*, Petrokov. 1900.
- 7) Menuhah Gilboa, *op.cit.*, 149.
- 8) ロシアにおけるヘブライ語文学の普及を語る上で興味深い主題の一つは、女性読者ならびに女性によるヘブライ語文学の存在であろう。本稿で扱うアブラハム・マプーは『シオンの愛』出版の前年(1852年)に、原稿を知人の女性に送り、女性の立場からの批判や忠告を求めている。さらにヘブライ語による執筆活動を行った女性作家も19世紀半ばに生まれている。とくに英国ユダヤ史のヘブライ語訳をゴルドンの支援を受けて1869年に出版したミリヤム・マルケル=モーゼソン(Miriam Markel-Mosesshon 1839-1920)は特筆すべきであろう。彼女は歴史書の翻訳を通して、ヘブライ語の近代的表現に果敢に挑んだ。彼女はゴルドンが編集していたヘブライ語紙の『ハ・メリツ』にも寄稿していたが、1880年代にゴルドンと決別したのち、ヘブライ文学から遠ざかることになる。Carole B. Balin, *To Reveal Our Hearts: Jewish Women Writers in Tsarist Russia*, Hebrew Union College Press, Cincinnati, 2000, pp. 19, 35-40.
- 9) Brainin, *Fun mayn lebns-bukh*, p. 181-182. ブライニンは少年時代から作家になりたいとおもっていたが、子供の頃はレスボンサ、あるいはムサールの著作以外にヘブライ語による世俗的文学が存在するとはしなかったと述べている。
- 10) Robert Alter, *op.cit.*, p. 6, p. 52.
- 11) マプーの全作品、およびリエンブルムの著作のほとんどは Project Ben Yehuda (<http://benyehuda.org>) によりデジタル化されインターネットで読むことができる。マプーの著作のなかでも『シオンの愛』は多くの言語に翻訳されている。1874年にワルシャワでイディッシュ語訳が出版され、イディッシュ語読者のあいだで人気を博した。1885年にはライプツィヒでドイツ語訳が、1887年にはロンドンで英訳が出版され

た（1902年にはニューヨークでも翻訳出版され、以降も1919年、1922年、2006年に英訳版がある）1899年にはカイロでアラブ語訳が出版、またフランス語訳（パリ1937年、1946年）、ロシア語訳もある。一方『偽善者』もイディッシュ語訳があり、英語ではパターンソン著『マプー』（Patterson, *Abraham Mapu: A Literary Study of the Creator of the Modern Hebrew Novel*, London, 1964, pp. 146-167.）に詳細な紹介がある。

- 12) Abraham Solomon Waldstein, *The Evolution of Modern Hebrew Literature*, New York, 1916, pp. 18-19.
- 13) Reuven Brainin, *op.cit.*, p. 30.
- 14) Slouschz, N., *The Renaissance of Hebrew Literature*, 1902, p. 76-77.
- 15) Елена Римон, «Солнце еврейского просвещения» Лехаим, Июнь, 2009. より引用。
- 16) Steven J. Zipperstein, *The Jews of Odessa: A Cultural History, 1794-1881*, Stanford University Press, 1986, pp. 141-148.
- 17) リリエンブルムの生涯と『青春時代の罪』については以下を参照。Lucy S. Dawidowicz, *The Golden Tradition: Jewish Life and Thought in Eastern Europe*, Boston, 1967, 113-132; Lilienblum, M., “Hatot ne’urim”, *Kol kitvei Moshe Leib Lilienblum*, Krakow/Odessa, 1910-1913, vol. 2, 201-410.
- 18) Dawidowicz, *op.cit.*, p. 122
- 19) Marcus Moseley, *Being for Myself Alone: Origins of Jewish Autobiography*, Stanford University Press, 2005, p. 371.
- 20) Dawidowicz, *ibid.*, pp. 306-311.
- 21) Дубнов, С., Книга жизни: Материалы для истории моего времени, Москва /Иерусалим, 2004, с.70.
- 22) 例えば Gershon Shaked, *Modern Hebrew Fiction*, Indiana University Press, 2000.
- 23) Arthur Hertzberg ed., *The Zionist Idea*, New York, 1986, p. 169.
- 24) とはいえリリエンブルム自身は一度もパレスチナに行かなかった。リリエンブルム以降のロシア・シオニズムに関しては鶴見太郎『ロシア・シオニズムの想像力』東京大学出版会、2012年を参照されたい。
- 25) 『ハ・シャハル』は1876年に創刊した月刊誌。スモレンスキ、リリエンブルム、ゴルドンらが集った。スモレンスキの死と共に1888年に廃刊。
- 26) С. Цинберг, «Литература ново еврейская», Еврейская Энциклопедия, том10, 1908-1913, p.280.
- 27) 1880年代以降に始まるロシアから北米への大量移民は、伝統社会の緩みの結果であり、かつ原因であると考えられる。アメリカ移住に対する正統派ラビの批判については拙稿「ロシア帝国のユダヤ人——ロシアがユダヤ史に及ぼした影響」、塩川伸明・小松久男・沼野光義編『ユーラシア世界2 ディアスポラ論』東京大学出版会、2012年、107-130頁。
- 28) 定住地域の成り立ちとオデッサについては拙稿「地域問題としての『ユダヤ人問題』」、『ロシア史研究』76号、ロシア史研究会、2005年、67-77頁を参照。
- 29) 1897年の国勢調査による。オデッサ以外の定住地域の県市のユダヤ人人口は、ヴィリニウス6万4000人（総人口の41%）、カウナス2万5000（36%）、キエフ3万2000

第Ⅱ部：日本におけるヘブライ文学とユダヤ学

(13%)、ヴィテプスク 3万4000 (52%)、ジトミール 3万1000 (47%)、ピアリストク 4万2000 (63%)、エカテリノスラフ 4万1000 (36%)、ミンスク 4万8000 (52%) であり、オデッサはユダヤ人の急激な流入により定住地域で最もユダヤ人が集中する都市となっていた。

- 30) J.G.Kohl, *Russia: St. Petersburg, Moscow, Kharkoff, Riga, Odessa, The German Provinces on the Baltic, The Steppes, the Crimea and the Interior of the Empire*, London, 1842, pp. 419-420. ちなみにコールは「ユダヤ人は全員野卑なドイツ語を話している」と述べており、イディッシュ語をドイツ語として扱っている。
- 31) とはいえユダヤ人がキリスト教徒と混成社会を形成していたのではない。ジャボティンスキーによれば彼は世俗化した家庭で育ったにもかかわらず、少年時代ひとりもキリスト教徒の友人はいなかった。Nicolas V. Iljine ed., *Odessa Memories*, University of Washington Press, 2004, p. 27.
- 32) この時期のメンデレによるヘブライ文学における革命的役割については Shaked, *op.cit.*, p. 12を参照。
- 33) Yehudah Slutski, “Ha-pirsumim ha-‘ibriim beBrit-hamoatsot beshanim 1917-1960,” Khone Shumeruk ed., *Pirsumim Yehudiim beBrit-hamoatsot*, Jerusalem, 1961, pp. 24-25.
- 34) Yehoshua A. Gilboa, *A Language Silenced: The Suppression of Hebrew Literature and Culture in the Soviet Union*, New York, 92-94; Zvi Gitelman, *Jewish Nationality and Soviet Politics: The Jewish Sections of the CPSU, 1917-1930*, Princeton, 1972, pp. 280-281.